

こちら特

へこたれない人々

2011年新春

日本でただ一人の“水牛農家”だった。宮崎県の長男。高校卒業後、親都農町の、日向灘を見下ろす山あい、竹島英俊(みゆたけ)が経営する市内のカソリ(カソリ)の牧場はあった。放牧された水牛が、のんびり草をはむ。その乳を毎日搾り、新鮮なモッツァレラチーズをつくった。そんな日々が突然、消えた。

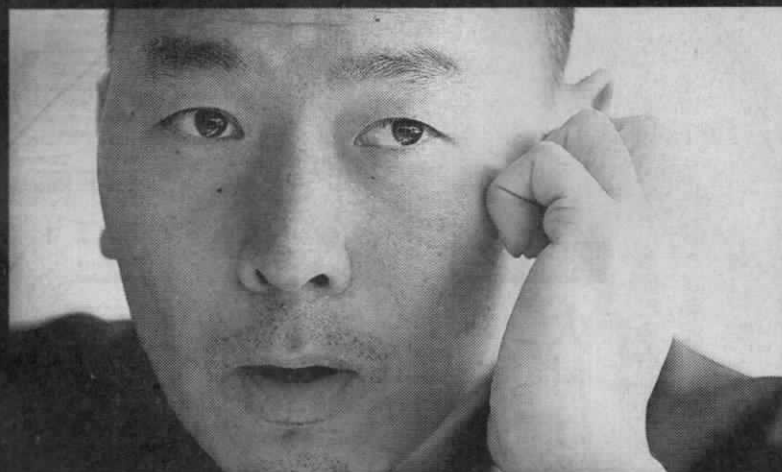
宮崎で口蹄疫が確認されたのは、昨年四月二十日。行政の対応が遅れ、感染は爆発的に拡大。四カ月後の終息宣言までに、約二十九万の牛や豚が殺処分された。この中、竹島が飼育していた四十二頭の水牛がいた。

チーズづくりは三年目。美味が評判となり、東京などのイタリアンレストランに出荷を始めていた。まさにこれからという矢先に、莫大な借金だけが残った。

東京都国立市に生ま

口蹄疫がすべて奪った

日本でただ一人の“水牛農家”だった  
竹島 英俊さん(37)



軌道乗った矢先 全頭処分

たけしま・ひでとし 1973年東京生まれ。2004~07年、イタリアでモッツァレラチーズの製造や水牛飼育を学ぶ。08年3月から、宮崎県都農町の山中にある牧場で飼育を始める。生産したチーズが好評を博していた昨年4月、飼育していた水牛全頭が口蹄疫で殺処分され、牧場を閉鎖した。



がらんとした牧場には感染牛を埋葬したことを告知する板が立つ=宮崎県都農町で



告  
当地は、「口蹄疫」に感染若しくは疑いのある汚染物品を埋却したので、家畜伝染病予防法に基づき、下記の期間の発掘を禁じます。

禁止期間 平成22年4月25日から3:  
平成  
宮崎

探すと、今度は「水牛なんて前例がない」と売ってもらえない。到着直前に見つけたのが、宮崎の山奥だった。牧場で寝起きし、本場の味を出すため試行錯誤した。設備にもこだわった。四五月ほどで納得のいく味に。パート従業員も五、六人雇えるようになった。

ズの製造作業を“凝視”し続けた。「見よう見まねで練習していたら、根負けした職人に『おまえ、やってみろ』と声をかけられた」。その後、一流といわれる工場でも修業を重ねた。

〇七年秋に帰国。水牛探しが始まった。イタリアは口蹄疫の感染疑いがないと国際機関が認定した「清浄国」でないと、牛の直輸入ができなかった。本場の味にこだわって探し続け、ついに清浄国のオーストラリアで、イタリア産の水牛を飼う農家を見つけた。

五千万円で輸入することになり、関東で土地を

# 二 ちろ 特 報 部

# 犯人扱い 濡れ衣まで

分かってから、根も葉もない噂が飛び交った。「(口蹄疫が先に発生していた) 韓国から、牧場に研修生が来ていた」「水牛は韓国産」…

「心労から自殺した」というデマまで流れた。孤立無援だった。「逃げた」と言われたことなく、水牛が殺処分された後も三月、一人で牧場に残って草刈りをした。夜眠れず、体調を崩した。ある日鏡をみると、壮絶な顔が映っていた。

口蹄疫が先に発生した韓国から牧場に人が訪れ、水牛が感染したかのようなきさ方だった。牧場は最寄りのJR都農駅から車で三十分かかる山奥にあり、看板もない。不特定多数の外部の人が来ることもなかった。竹島がいち早く異変に気づき、まじめに通報したのが裏目に出たといふようがない。感染確認は「六例目」だが、検

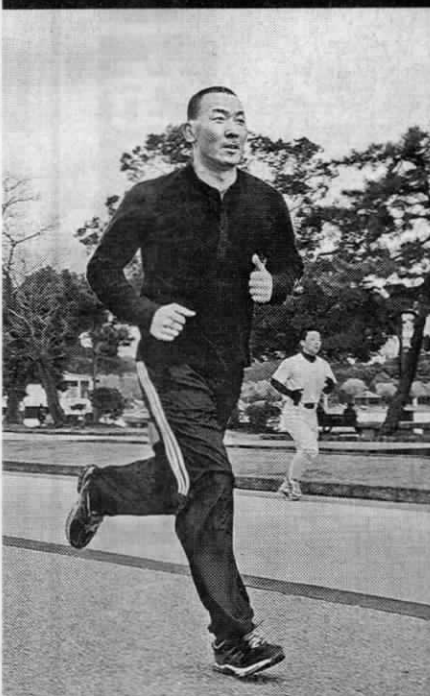
## 中傷やデマ… 行政にも絶望

中傷とたたかう竹島を絶望させたのは、県と国の態度だった。昨年七月二十五日に更新された東国原英夫知事のブログでは「初発・6例目」と題され、「最初から口蹄疫に気付いていたのに、わざと言わなかったように書かれた」と言う。

さらに情報公開請求で開示された県の報告書に目を疑った。県畜産課が作成した「竹島農場疫学調査票」には、牧場の来訪者欄に「不特定多数が勝手に入ってくる」、観客欄に「不特定多数、国籍不明」とあった。結果は陽性だった。

「牛がボーツとしていられる」と竹島が獣医師を呼んだのは、昨年三月二十日。風邪にみえたが、家畜保健衛生所にも感染症や中毒の鑑定を依頼。三十一日に検体が採取された。このとき衛生所は、口蹄疫を調べる国の機関に検体を回さなかつた。その二十日後、口蹄疫発生ニュースが流れ、竹島は自ら、感染を調べるよう依頼した。結果は陽性だった。

牧場でゆっくりと草をはむ、ありし日の水牛たち  
—2008年9月、宮崎県都農町で(竹島さん提供)



自宅近くの公園でランニングする竹島さん＝福岡市中央区の大濠公園で

## チーズづくり再開誓う

感染経路を調べる農林水産省の疫学調査チームや県は、竹島の水牛が「初発」とし、口蹄疫の「感染源」と推定している。

しかし、第三者機関の県口蹄疫対策検証委員会(座長・原田隆典宮崎大教授)は、受託オーナー制で全国展開する大規模農場が初発の可能性を示唆する。農場は感染爆発した川南町にあり、獣医師らが検査に入った四月下旬、「既に治癒した牛が多くいた」からだ。

多くの獣医師も同じ見方をする。都農町の青木淳一医師は「人里離れた山にいた数頭から感染が拡大したというのは、疫学的にもおかしい。感染爆発した地域で、その前に広がっていたと考える方が妥当」と語る。

竹島の水牛を診察した獣医師は、県獣医師会見湯支部の記録集に「行政関係者だけに対応している」と、いつの間にか体制にあわせてうわさ話や中傷が飛び交い、真実が伝

「何が真実なのかは、神様が知っています。ようやく気持ち切り切れてきた。これからがスタートです」。何もかも失った川南町にあり、獣医師も、借金を返し、十年以内にはチーズづくりを再開したい。

「だって本心に素晴らしい仕事ですから」(敬称略、出田阿生)

「悲愴な目に遭った農家は多いが、竹島さんの濡れ衣(ぬれぎぬ)は放置されたままだ。本紙を含め報道機関は県の情報で「水牛農家が初発」と感染源扱いしてきた。だが現地取材を続けた出田記者は「水牛は違うよ」などと繰り返す報告。竹島さんも今回胸を開いてくれた。東国原知事は何と聞く。(巴)

### デスクメモ